

欧米におけるアーバンスタディーズ研究とその領域形成過程

前山 総一郎

要旨

アーバンスタディーズという領域がその射程としてどのような柱を得てきているのかについて検討した。その結果、第一に、1980年代以降、オレゴン州から先駆けて開発された、成長管理イシューを基盤として展開してきたことが確認された。第二に、ソジャらによって展開された「ロサンゼルス・アーバンスタディーズ学派」の「都市の再構造化」研究がアーバンスタディーズ領域にとっての研究及び政策論議の柱となったこと、そして米国のアーバンスタディーズの教育研究に影響を与えてきていることを示した。

アーバンスタディーズは、「都市研究」といった平板なものではなく、これら固有の研究および政策論議の柱をもち、その研究と政策討議のためのアリーナとしての舞台として成長した。

キーワード：アーバンスタディーズ、ロサンゼルス学派、エドワード・ソジャ、成長管理、文化論的転回

1 はじめに

「アーバンスタディーズ」(Urban Studies)研究は、米国とヨーロッパにおいて発達してきている。単に「都市研究」といった平板なものとして捉えられるものではなく、固有の背景と意味を有している。アーバンスタディーズ研究は、米国において100以上の大学がアーバンスタディーズの専門コース及び学部を設置しており、一つの領域として立てられている。本稿は「都市経営」(Urban Management)の構想との関わりで調査をおこなっているところであり、その観点から、アーバンスタディーズ研究の展開と現代に形成されてきたその特質について素描したい。(尚また、本研究は、筆者自身のワシントン大学Urban Studies学部(客員研究員)での研究活動に基づいている)。

現在、米国において、独自の学部さらには、修士号課程、博士号課程をもつアーバンスタディーズ学研究科がある。現在、米国では、ポートランド州立大学(Portland State University)、マサチュー

セッツ工科大学(MIT)、クリーブランド州立大学(Cleveland State University)、ウィスコンシン大学(University of Wisconsin)、ニューオーリンズ大学(University of New Orleans)に、アーバンスタディーズ学の博士号課程が設置されている。

その特質について、最も早期に設置されたポートランド州立大学を例として見ておきたい。オレゴンシャイン成長管理政策で全米的に地域の成長管理策の規範となったオレゴン州(前山 2009; Pallagst 2011)によって、オレゴン州立大学に1959年、「アーバンスタディーズ及びアーバンプランニングトゥーランスクール校」(Toulan School of Urban Studies & Planning)が設置された。そのミッションは次のように設定された。

「我々のミッションは、学際的プログラムの、教育研究および公共サービス貢献を通じて、健康なコミュニティの発展をアシストすることにある。」⁽¹⁾

そして、同校は現在、学部課程、修士課程、博士課程を備えている。そのアーバンスタディーズ研究

科の博士号課程において、次の教育課程が示されている（図1）。

そして、主要な教育研究にあって取り組む柱として次のことが記される。

図1 アーバンスタディーズ博士課程教育課程（概略版）（Oregon State University）

<p>(1) 基幹教育課程 (Core Curriculum)</p> <p>①都市開発および都市生活についての基本的なアイデア、コンセプト、理論 都市経済構造及び都市空間構造 (Urban Economic and Spatial Structure) アーバンスタディーズの歴史と理論 (History and Theory of Urban Studies) 都市生活の社会学と政治 (Sociology and Politics of Urban Life)</p> <p>②当該領域に即した一連の方法の修得 研究デザイン (Research Design) データデザイン (Data Analysis) 質的調査分析 (Qualitative Analysis)</p> <p>③実践的な社会科学的研究にコミットと研究関心に沿った研究デザイン提案 アーバンスタディーズ演習 (Urban Studies Seminar)</p> <p>(2) 専門研究 (Specialization) 下記の学際的应用領域のうちから、各自二つを選択。 プランニング (Planning) コミュニティデベロップメント (Community Development) 経済開発 (Economic Development) 環境学 (Environment) 老年学 (Gerontology) 社会人口学 (Social Demography) 交通学 (Transportation)</p> <p>(3) 学位論文 (Dissertation)</p>

「都市地域とその諸問題についての理解、都市の発展および障害克服にむけた政策分析が、アーバンスタディーズ博士課程の主要事項である。同プログラムは、都市地域のダイナミズムを維持するための三つの主要な問題対象を設定している。そして、

アーバンスタディーズ博士課程はこれら諸問題を、複合分野連携および学際的な視点からの展開開発をおこなう。

1. 都市地域内における諸地域ないし諸人口グループ間にある社会的および経済的不均衡の成長にかかわる諸問題
2. 都市化のパターンに関わる環境諸問題
3. 地域ガバナンスの実効的制度の欠如という問題」⁽²⁾

実践的な科目配置とコースワークが図1から読みとれるとともに、とりわけ、そこにおいて①社会的・経済的不均衡の是正、②都市パターンと環境問題、③地域ガバナンス制度、の三点にウェイトがおかれる形で展開されている。

教員としては、学科長を含めて、ファカルティの教授陣が23名、他に関連教員（adjacent教員およびアフィリエイト教員）48名の、総計71名から構成されている。ファカルティメンバー23名の専門は、都市プランニング、政治学、地理学、経済学、人口学、社会学、交通学、景観、環境学、自治体研究、コミュニティデベロップメントとなっている。

アーバンスタディーズに関してはこれまで、多分野ゆえ統合が難しいといった評価がなされたり、専門学問の周辺領域として扱われてきたとされることが多いのだが、マサチューセッツ工科大学（MIT）、クリーブランド州立大学の博士課程においても、教員構成のウェイトや、設置の経緯がやや異なるものの基本的には類似の枠組みを示している⁽³⁾、一定の枠組みをアーバンスタディーズが形づくっているように見受けられる。では、どのような過程でアーバンスタディーズ研究は形成されたのであろうか？

2 アーバンスタディーズの展開

2.1 アメリカにおけるアーバンスタディーズ研究の形成

アーバンスタディーズ研究は、米国およびイギリスから始まった。R.ボーリガードによれば（Beauregard

2010, 931f.) , 農村基盤型社会から都市型産業社会への社会的激変が生じ、都市の問題が実際に解決すべきものとしてクローズアップされたことがアーバンスタディーズ研究の発生と関わっている。第二次世界大戦の後、進んだ産業構造のリストラクチャリングが諸都市において新たな形で貧困問題と人種問題を産んだ。1950年代から60年代にかけて、白人家庭は顕著に郊外に移住し、それと連動して人種的な分離がそれまで無かった形でおこり、かつ所得と教育等機会の不均衡とが、都市の地理的な分断、拡散といった様相のなかで進んだ。

まさに、1960年代に、米国において、都市とその諸問題が公共的な関心の中心に据えられることになる。ジョンソン政権(1963-69年)が、米国全体をあげての社会改革を標榜し、都市問題にむけての各種政策改革に着手した。また、ラッセルセージ(Russel Sage)財団やフォード財団などの民間財団も都市問題の改善にむけての各種資金提供をおこないはじめた。とりわけフォード財団は、都市問題、都市内問題の解決に資する都市研究センターの設置をすすめるための助成金を大学に発給することとなった。1959年には、先のオレゴン州立大学における「アーバンスタディーズ及びアーバンプランニング トゥーランスクール校」の設置、またラトガーズ大学でのアーバンスタディーズセンター、ハーバード・MITのジョイント形式でのアーバンスタディーズセンター(Joint Center for Urban Studies)の設置が相次いだ⁽⁴⁾。そして、それらの大学において、アーバンスタディーズ研究をおこなう学部、大学院課程を設置するに到った。1969年には、アーバンスタディーズ研究への関心の高まりから、都市研究をおこなう諸大学によりCouncil of University Institutes of Urban Affairsが設立された⁽⁵⁾。(同協会の研究雑誌Journal of Urban Affairsは1980年に刊行された。)

1970年後半には、推定100以上の大学(college及びuniversity)がアーバンスタディーズのプログラムを実施するに至り、50以上の大学がアーバンスタディーズの修士課程を持ち、数大学が博士課程をもつに到った(Beauregard ibid, 933)⁽⁶⁾。

2.2 イギリスおよびヨーロッパにおけるアーバンスタディーズ研究の形成

イギリスにおいても、社会変動と社会改革への関心は同時期に高く、その結果、グラスゴー大学が1964年に学術雑誌"Urban Studies"を刊行するにいたった。また、1977年には、イギリス、フランス、イタリア等からの都市政治経済学研究者が集まり、International Journal of Urban and Regional Researchを刊行するにいたった。

米国と比較すると、イギリスおよびヨーロッパ諸国でのアーバンスタディーズ研究は二つの点で異なっている。

第一に、イギリスおよびヨーロッパ諸国で都市問題への関心の高まりとそれに基づいて都市問題研究者・実践者の連携が進んだのは、1990年代に入ってからということである。International Network for Urban Research Action (INURA)が1991年にスイスで創設された。理論家と実践家が現代の都市発展にむけての共通のアプローチを共有するために、立ち上げられた(都市再生プロジェクト、コミュニティ環境問題、都市労働市場、社会的ハウジング問題等)。また、1997年にEuropean Urban Research Associationが、フィンランド、ブルガリア、イギリス、ドイツ等からの支援で立ち上げられた(その研究雑誌Urban Research and Practice Journalは、2008年に創刊された)。European Urban Research Associationが2004年に設置された。とりわけ、European Urban Research Associationにあっては、欧州連合(European Union)の視点からする都市問題への関心から創設されたものである⁽⁷⁾。

第二に、他方で、大学でのアーバンスタディーズ課程は、イギリス、ヨーロッパ諸国では進まず、アメリカ以外では形成されなかったことにある。これは、イギリスおよびヨーロッパ諸国でのアーバンスタディーズの位置づけにかかわることから生じている。アーバンスタディーズというアリーナは、各学問分野が都市問題について討議するものではあるが、イギリスおよびヨーロッパ諸国においては、それまでの各学問分野においての周辺領域でしかなく、アーバンスタディーズ研究が固有のアイデン

ティティをもつに到らなかったことによる。

3 アーバスタディーズと成長管理策

アーバスタディーズが起こるにあたっては、幾つかのプランニングにおける動向が関連しているが、とりわけ1970年代以降に市や州で起こった、地域全体の成長を包括的にコントロールしようとする成長管理（Growth Management）の発想と動向が強く関連している。

地域の地区経済成長を目したRampo地域等での当初のものに加えて、とりわけオレゴン州のイノベティブな「成長管理システム」（Growth Management System）が他州にモデル的役割を果たしてきた。

当時、オレゴン州では州内各地域で産業構造の変化をはじめとしての社会変動にともなってスプロール化の出現、新たな格差、環境問題が意識されるようになった。環境団体と農業関係者からなる市民運動が起こり、さらに各自治体と州での研究が進められた。オレゴン州知事トム・マッコール（Tom McCall）が、自ら市民運動を支援しつつ、「都市成長境界域」（Urban Growth Boundary：UGB）を提起し、州が法制化し、1978年より実施されている。これは、州都ポートランド近隣での健全な地域発展の障害となる、無理な経済発展、地域環境の浸食、住宅地の無計画な拡大などを防止しコントロールするために編み出された手法で、住宅、ショッピングモールその他の都市開発が設定された境界を超えては許可されないしくみである（それにより、境界の外にある農業地やオープンスペースの状況が保全されるというものである）。そして、その人口、ハウジング、経済、雇用、環境にかかわる「都市成長境界域」の「管理」は、各自治体から州に集約される形で実施を保障する形となっている。

これに関して、州からの依頼に基づき、オレゴン州立大学は各種の調査をおこない⁽⁸⁾、さらにその後もUrban Studies学部を中心に同大学教授が多数研究と提言をおこなっている（Ozawa, Connie 2004；Oates, David.2006；Staley, Samuel 1999；Mildner, Gerald et. al 1996）。

最終的に、1980年代には、成長管理がプランニングにおけるメインストリームとなった。1970年代までの従来型プランニングに対して、タスクフォースによるコラボレイティブな手法が用いられ、従来型プランニングで縦割りの扱われていた諸要素（経済、環境、インフラ、生活の質）は、包括的フレームワークに融合されるものであった。（この方式は、さらに後におこるオレゴンシャイン方式とその指標管理方式への土台となった。）成長管理は、地域／都市の健全な成長にとって地域の人口、ハウジング、経済、雇用等を包括的にコントロールすることから、その土地利用の手法、住民の社会状況の把握、条例設置によるコントロール、包括型総合計画との関わり、指標管理等の視点も含め、経済学、地理学、社会学、法学、都市工学が一体となって関わることが強く求められた。1980年代を通して、成長管理がアーバスタディーズの研究と活動に大きな影響を与え、かつ一つの内実を形成してきた。各大学において、成長管理に関する科目が多く設置された。

4 文化論的転回とアーバスタディーズ研究

－「ロサンゼルス・アーバスタディーズ学派」 （Los Angeles School of Urban Studies）－

1990年代になると、カルチュラルスタディーなどの文化論的転回に関わる新たな動向が起こった。アーバスタディーズ関係では、「ロサンゼルス・アーバスタディーズ学派」の出現がその嚆矢と考えられる（場合によっては、Los Angeles School of Urbanism:「ロサンゼルス・アーバニズム学派」とも称される）。それは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）と南カリフォルニア大学（USC）の都市研究者が都市再構造化（restructuring cities）のプロセスについての研究を、ロサンゼルス地域の詳細ケーススタディを基に展開したことから起こった。とりわけ、エドワード・ソジャ（Edward Soja）やマイク・ディヴィス（Mike Davis）ら地理学と社会学の研究者が中心となって進められた。かつての中心街が周辺地域に産業等で強い影響力を及ぼした

状態とは異なって、ロサンゼルスでは、破片化した都市諸部分と、弱体化した影響力しかもたない中心街という状況を眼前にしてそこに「都市化の新たなパターン」を見て、マルクス主義研究からポストモダニズムまでに及ぶ広範な理論を活用することになった。ソジャらは、それは幾つかの都市化プロセスが都市を全く新たなやり方で再構造化しているものとした。同学派が着目されたのは、ソジャの活動とともに、さらにM.ディア(Dear)とS.フルスト(Flust)による1998年からの集約的な刊行活動による。同学派は、約20人のメンバーからなる緩い繋がりであり、ポストモダンの捉え方、ポストフォーディズムの捉え方等について多様な理解の仕方をしてきたが、けれども基本的には、W.ニコルズ(Nocholls 2010)によれば、そこでの「都市の再構造化」(restructuring of cities)の理解は、次の形で捉えられたものであった。

①ポストフォーディズムへの転回

資本主義経済の危機への対応として、資本と労働の再配置が進む。企業が海外の安価な労働力を求めることから、主要な都市領域では「脱工業化」が進む。具体的には、大工場の「脱工業化」と「ポストフォーディズム」化、中小工場が集まって取引の集約的ネットワークを形づくるクラスター化が生じること(とりわけ、オレンジ群におけるテクノロジー産業、ハリウッドエンタテインメント産業、ロサンゼルス中心街の工芸産業等)。

②多極的都市

ポストフォーディズムと中小工場の特定地区ネットワーク化によって、かつての同心円構造をもつ都市域は、1970年代を通じて、多節的で多くの中心極をもつ、不規則に広がった都市域へと変容した。(これに対して、シカゴ学派の研究は同心円構造をもつ都市域の認識と調査に基づいていた。)それは、カオスの結果などではなく、あくまでもポストフォーディスト資本主義の空間ロジックの結果であった。

③社会成層の新たな様式

都市の再構造化と新たな不均衡は、密接にリンクした。グローバリゼーション、労働削減、工場閉鎖が、黒人、また専門職アジア人、ヒスパニックとい

う移民の波動状流入と相まいつつ、ミドルクラスの職を大幅に奪い、高度知的職の労働の増加とともに、労働集約型サービスに従事する低層労働の増加への、職と所得の二極構造を産み出し、労働の新たな社会的分配と新たな社会成層が起きていた。

④断片化された大都市のガバナンスのありよう

都市域に対するガバナンス制度は極めて弱体であり⁽⁹⁾、地区をミドルクラスの利益的観点からさらに細分化させることにつながっている(人種統合学校政策からの逆行、ロサンゼルス市からの離脱など)。さらに、犯罪率の増加、市の警察関係予算の削減により、「恐怖感にもとづくニューカルチャー」というものが生じたことから、厳格な法執行への要請と民間警備の進展と、数千におよぶ「要塞化されたゾーン」としてのゲイテッドコミュニティが広まった。

主として、以上同学派においては、ポストフォーディズムへの転回、都市の多極化、新たな社会成層と不均衡、弱体なガバナンス制度と都市域の断片化(ゲイテッドコミュニティ)という諸相が連鎖し侵攻して「都市の再構造化」が展開された。同学派は全米に、さらに国際的に大きな影響力を及ぼした⁽¹⁰⁾。米国の主要大学におけるアーバンスタディーズ学部ないしコースにおいて、都市の再構造化ないしソジャらに関する講義が設置されている(表1)⁽¹¹⁾。

文化論的転回は、都市研究においては、根本的に、グローバリゼーションと新たな経済状況(New Economy)という二つの主要な外力とのかかわりでの深甚な示唆を提起するものと考えられよう。

アーバンスタディーズ領域は、1980年代に成長管理を、領域の射程にあったの主要な研究対象ないし政策課題対象としてきたが、1990年代以降にはさらにその動向を、都市の再構造化問題の提起として受け止め、その新たな動向の波に乗り、文化論的転回からの諸提起自体を自らのフィールドの主要な論点とすることに成功した。

表1 アーバンスタディーズ学部／コースにおける「都市の再構造化」に関わる科目設置

大 学	学部 / コース	科目（「都市の再構造化」ないし E.Soja らの研究に関連したもの）
California State University	Urban Studies and Planning	• Growth and Development of Cities
Dillard University	Urban Studies & Public Policy	• Introduction to Urban Studies: Theory, History, Practice
Harvard		• Planetary Urbanization
MIT	Urban Studies and Planning	• From cities in global context to the post-modern (and pre-modern?) city • Urban political economy II: capitalism and urban dynamics
Oregon State University	Urban Studies	• History and Theory of Urban Studies
San Francisco State University	Urban Studies and Planning	• Seminar in Urban Studies and Planning
Stanford University	Urban Studies	• Economic Policy Analysis
University of California, Los Angeles	Urban Studies	• An Introduction to Critical Urban Studies
University of San Francisco	Urban Studies	• Urban Culture

※アーバンスタディーズ学部／学科の科目のシラバスに掲載されたもの

5 おわりに

本小論で得たことを記しておきたい。米国においてアーバンスタディーズに固有のアイデンティティがあること（ヨーロッパにおいてのみアーバンスタディーズが教育制度となっていること（Urban Studies学部・研究科の設置）が示されてきたが、本稿ではそのことの上に、アーバンスタディーズという領域がその射程としてどのような柱を得てきているのかについて、次の点を確認した。

第一に、アーバンスタディーズが、1980年代以降成長管理イシューを基盤としつつ展開してきたことが確認された。オレゴン州の成長管理の誕生以来、地域／都市の健全な成長にとって地域の人口、ハウジング、経済、雇用等を包括的にコントロールする必要から、また土地利用、住民の社会状況把握、法規利用、公計画運用、指標管理等の視点が必要とされることから、経済学、地理学、社会学、法学、都市工学が一体となって関わるのが強く求められ、

1980年代後半には成長管理がアーバンスタディーズにとって全米的に主要な研究および政策的対象となり、各大学に成長管理に関わる科目が増大した。

第二に、1990年代以降、文化論的転回の動向において、ポストフォーディズム転回を標榜したE.ソジャらによって展開された「ロサンゼルス・アーバンスタディーズ学派」の「都市の再構造化」研究が、さらにアーバンスタディーズ領域にとっての研究及び政策論議の柱となったこと、そして米国のアーバンスタディーズの教育研究に影響を与えてきていることを示した（米国のアーバンスタディーズ学部大学における「都市の再構造化」とソジャ研究に関連する科目の増加）。

以上から、アーバンスタディーズ領域が、1980年代に成長管理、1990年代以降に都市の再構造化を、領域の射程にあつての主要な研究対象ないし政策課題対象としてきたことが示された。

尚、この過程を通じて、ポストフォーディズムへの転回、都市の多極化、新たな社会成層と不均衡、弱体なガバナンス制度と都市域の断片化という多相

的な状況に向かいあうために、アーバンスタディーズは、研究と政策にむけての討議のためのアリーナとしての舞台として成長したと言える。

最後に、日米の状況的な違いについて触れておきたい。日本におけるソジャ、ディヴィスらの「都市の再構造化」研究／ポストフォーディズム転回研究についての理解と討議が専ら「思想」領域においてなされる点が目に付く。上述のように「ロサンゼルス・アーバンスタディーズ学派」の事例にあっては、ポストフォーディズム転回と「都市の再構造化」の研究および政策的討議が、アーバンスタディーズでの理論化と現地での実地研究（ロサンゼルス学派におけるケーススタディ諸研究）との往復運動のなかで深化してきていた。ロサンゼルス地域、とりわけその南地区を舞台としての大企業の脱産業化、中小工場の結節化、社会成層の編成と不均衡問題を空間的状况を基盤としてつぶさに見ながら捉える実地研究が進められ、それゆえに強い訴求力を得ることとなっている。ソジャらの「都市の再構造化」研究／ポストフォーディズム転回研究がそれを稔らせるため、机上のみならず、アーバンスタディーズという「耕地」を持っていたことに留意しておきたい。

参考文献

- Aiken, Michael and Manuel Castells, 1977, *New Trends in Urban Studies: Introduction, Comparative Urban Research* 4 (2-3)
- Beauregard, Robert A., 2010, *Urban Studies*, in: Huchison (ed.), 2010, *Encyclopedia of Urban Studies* Volume 2, Sage
- Davis, Mike, 2006, *City of Quartz: Excavating the Future in Los Angeles*, updated edition, Verso.
- Dear, M., 2002, *From Chicago to LA: Making Sense of Urban Theory*, Sage
- Flyvbjerg, Bent, 2001, *Making Social Science Matter: Why Social Inquiry fails and How It Can Succeed Again*, Cambridge University Press
- Fulton, William, 1997, *The Reluctant Metropolis: The Politics of Urban Growth in Los Angeles*, Solano Press book
- Gottdiener, Mark D. and Leslie Budd, 2005, *Key Concepts in Urban Studies*, Sage
- D. Harvey, 1987, Three myths in search of a reality in urban studies. *Environment and Planning, Society and Space*, volume 5
- Hutchison, Ray, (ed.), 2010, *Encyclopedia of Urban Studies* Volume 1, Sage
- Hutchison, Ray, (ed.), 2010, *Encyclopedia of Urban Studies* Volume 2, Sage
- Jun, Myung-Jin, 2004, The Effects of Portland's Urban Growth Boundary on Urban Development Patterns and Commuting, *Urban Studies* 41(7)
- 前山総一郎, 2009, 『直接立法と市民オルタナティブ—アメリカにおける新公共圏創生の試み』お茶の水書房
- Maeyama, Soichiro, 2013, Fundamental Consideration on Public Development Authority in terms of the Paradigm Shift in *Urban Management*, 都市経営, 第4号
- 町村敬志, 1999, 『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社

Mildner, Gerald C.S., Kenneth Dueker, Anthony Rufolo, 1997, *Impact of Urban Growth Boundary on metropolitan Housing Markets*, Center for Urban Studies, Portland State University

Miller, D.W., 2000, *The New Urban Studies*, *The Chronicle of Higher Education* 47(50)

Nicholls, Walter J., 2010, Los Angeles School of Urban Studies, in: Hutchison (ed.), 2010, *Encyclopedia of Urban Studies* Volume 1, Sage

Oates, David. 2006, *City Limits: Walking Portland's Boundary*, Oregon State University Press

Ozawa, Connie P., 2004, *The Portland Edge: Challenges and Successes in Growing Cities*, Island

Paddison, R. (ed.), 2000, *Handbook of Urban Studies*. Sage

Pallagst, Karina M., 2010, Growth Management, in: Hutchison (ed.), 2010, *Encyclopedia of Urban Studies* Volume 2, Sage

Soja, Edward W., 1989, *Postmodern Geographies : The Reassertion of Space in Critical Social Theory*, Verso (エドワード・W.ソジャ著; 加藤政洋 [ほか] 訳, 2003, 『ポストモダン地理学 : 批判的社会理論における空間の位相』 青土社)

Soja, Edward W., 2000, *Postmetropolis: Critical Studies of Cities and Regions*, Blackwell

Staley, Samuel R. and Gerald C.S. Mildner, 1999, *Urban-Growth Boundaries and Housign Affordability: Lessons from Portland*, Policy Brief (Reason Public Policy Institute) No.11

University of Michigan, 1971, *Urban Studies Bibliography*, Reprints from the collection of the University of Michigan Lilbrary

吉原直樹, 2008, 『モビリティと場所 : 21世紀都市空間の転回』 東京大学出版会

Yoshihara, Naoki, 2010, *Fluidity of Place: Globalization and the Transformation of Urban Space*, Trans Pacific Press

Zacks, Stephen, 2004, *Urban Studies*. *Metropolis* 24(1)

注

- (1) <http://www.pdx.edu/usp/> (2014年3月29日現在)
- (2) <http://www.pdx.edu/usp/doctoral-degrees> (2014年3月29日現在)
- (3) マサチューセッツ工科大学 Urban Studies 博士課程 <http://dusp.mit.edu/degrees/doctoral>; リーブランド大学 Urban Studies 及び公共政策博士課程 <http://urban.csuohio.edu/academics/graduate/phd/> (2014年3月29日現在)
- (4) さらに同時期に、ペンシルヴェニア大学、イェール大学、コロンビア大学が積極的にアーバンスタディーズセンターを設置した。
- (5) 同協会は、1981年に Urban Affair Association へと名称変更した。
- (6) この時点におけるアーバンスタディーズの射程は、近年ミシガン大学からリバイバルされた『アーバンスタディーズ書誌目録』に見て取れる (University of Michigan 1971)。
- (7) また、ヨーロッパ各国では、都市研究者の自己認識の形成は拡散している。フランスでは1968年(H.ルフェーブルによる); オランダ 1993年 (Amsterdam Study Center for the Metropolitan Environment 設置); ドイツ 2004年(Center for Metropolitan Studies at the Technical University in Berlin の設置); メキシコ 1964年(El Centro de Estudios Demograficos, Urbanos y Ambientles の設置); フィンランド 1968年(Center for Urban and Regional Studies)
- (8) Oregon State University, *Urban Growth Boundary Findings*.
- (9) 例えば、独立市となっていない地域にゾーニング権を授与する Lakewood Plan が存続していることによって、ミドルクラスの地区に低所得者の流入を実質的に妨げることが維持されている。さらにこのことは、ホームオーナーアソシエーション (HOAs) の存在によってさらにバックアップされている。
- (10) Nicholls, *ibid*, p.472f.
- (11) 図2は、アーバンスタディーズ学部ないしコースを持つ大学のシラバスの掲載内容にのみ基づい

ている。関連学部（アーバンデザイン学部，都市人類学学部等）で都市の再構造に関わる科目はさらに多数に上る。

Urban Studies and its making process in US and European Countries

Soichiro MAEYAMA , Ph.D

This article aims at clarifying how Urban studies as the inherent arena has acquired its main objects for research as well as policymaking. As the result of our examination, we have two findings. 1)As its main arena issue Urban Studies has committed the study, research on Growth Management, that was firstly invented and implemented by the State of Oregon (Urban Growth Boundary : UGB) . And the number of class subjects that treat Growth management increased in Urban Studies courses in universities in US in 1980s. 2) The issue of "restructuring of cities" was set up by Los Angeles School of Urban Studies (E.Soja, M.Davis et.al) in terms of cultural turn and especially post fordist-turn. The theme is combined with multi factors such as post-fordist, deindustrialization of firms, polycentric city region, new inequalities in new urban restructuring, governing way of fragmented metropolis etc. Urban Studies adopted that issue as the other main arena issue for discussion for research and policymaking in 1990s.

Keywords : Urban Studies, Los Angeles School of Urban Studies, Edward Soja,
Growth Management, Cultural Turn